
新しい評価を求めて テスト教育の終焉

キャロライン・V・ギップス著

鈴木秀幸訳

論創社、2001年

第2章 評価と学習の関係

●伝統的な学習モデル

伝統的な学習モデル

- ・分割可能性
- ・非文脈化

この2つの仮定が根底にある

分割可能性

「複雑な実行能力の学習を個別の技能に分けることで学習できるとした」(p.25)

→ブロック積み学習モデル

*個別の技能を指導しテストする

→問題解決能力や考える能力は育成できない

→構成要素どうしが関連しあっていることの発見が難しい

行動主義 (=ブロック積み学習モデル)

→学習は直線的で連続していると考え

→基礎となることの学習が完了してから複合的理解が始まると考える

非文脈化

「技能とそれが用いられる文脈には密接な関係がある」

→技能や知識は学習や練習した文脈によって左右される

*技能の転移可能性と一般化可能性

→広い分野で使える技能が、特定の文脈だけの学習では発達しない

これら3つは、「学習目標を全て特定して測定でき、さらにテスト問題に解答できれば、意図した技能や概念を習得したと考える」(p.28) 考え方に依拠している。

第2章のテーマ

- ・テストがどの程度学習目標を反映できるか
- ・要求されている学習がテストの内容によって明確化できるか

●認知論的および構成主義的な学習モデル

認知論的学習モデル

- 直線的で階層のある学習モデルに対抗して登場
- 学習を多方向から結びつける一種のネットワークとして考える
- 学習にしたがって再編成、再構成したりする有機的な過程を学習とみなす
- 学習指導は知識の移転ではなく、継続的な知識の構築過程への介入すること

構成主義的な学習モデル

- 状況に応じて方法を自覚する
- 新しい情報に個人的な意味づけをする
- 結果として得られた学習内容を構造化する
- これを評価するのは知識を原子化するような評価方法をとるべきではない

教師の「メタ認知的な役割」

伝統的な教師と生徒の役割

- 生徒の役割は教師の質問に答えること

教師のメタ認知的な役割 (介入)

- 生徒と教師が共同して知識の構築にあたる
- 生徒が学習方法を学ぶことで、学習を意図的な過程とすることができる

メタ認知

- 思考についての思考
- 自分の学習を計画し、記録し、組み合わせてまとめ、調整するという自己認識活動
- 自分の知識や思考、そして学習を意識し、調整する過程
- * 学習者が自分の学習活動を調整する
- 「学習していることの意味を考えようとするためには、生徒が学習活動に対して、積極的に参加しているという意識をもつ必要がある」(p.34)

知的な初心者＝新しい分野についての背景となる知識はもっていないが、そのような知識を手に入れるための方法は知っている

●学習のための評価

「考えさせるカリキュラム」

→思考したり、推論したり、学習方法を学んだすることに主眼をおいたカリキュラムを表す
「全地球的規模での技術や通信手段の変革や、世界的な規模での経済活動の発展を前にして、このような新しい基礎・基本が重要になった」(p.35)

「考えさせるカリキュラム」の必要性

・経済的、文化的理由

「一生に1つの職業や職歴をもつのではなく、1つかそれ以上の仕事の変更や労働環境の変更を経験するような世代の生徒を、私たちは教育しているからである」

「決まり切った作業ををできるようにすることではなく、推論したり思考できるようになる学習プログラムを提供することである」

・思考、推論の研究

「構造化や理論的な説明なしに受け入れられた事実は、すぐに記憶から消えてしまう」

「高次の技術の学習はより長く記憶されるだけでなく、内発的なモチベーションの発達を促し、学習を継続する積極的な態度を形成する」

「考えさせるカリキュラム」と評価

→生徒が自分自身の学習について評価できるようになる(＝メタ認知の発達)

→自問し改善する方法を教師の支援を受けながら練習する経験となる

→評価に用いるべきクライテリアや期待されるスタンダードを理解するし、自分の学習を評価する(＝ループリック)

*評価に関する2つの問題提起

- ・学習の状況を性格に反映するにはどのような評価手段が必要か
- ・指導に好ましい影響をあたえるにはどのような評価手段が必要か

ヴィコツキーの「生態的妥当性」

→道具と支援の重要性を説く

「精神の昨日の発達には外部からの支援が必要不可欠」

→補助的道具を使用した評価方法

「評価の過程において補助的な道具の使用を許可するような評価方法を開発しなければならない」

ヴィコツキーの「発達最近説領域」

→子供が支援を受けた場合と、受けない場合の学習の差を表す概念

→子供が何を知っているかではなく、評価者との対話位において子供の学習の可能性を見ようとする

足場組評価

→教師が手助けをして子供に次のレベルをためしてみるようにする

→子供が次のレベルに近づいているかを評価する

(足場組評価に基づく) 動的評価

→必要なときだけ支援をあたえ、自分でできるときは、実行能力を発揮できる機会を与える

→評価においても、学習においても生徒と教師が協力して実行していく

→評価は支援の内容をあらかじめ定めている、指導はその場によって違う

ヴィコツスキーによるメタ認知の定義

→メタ認知とは、計画的な学習過程における自分の認知活動

→学習内容に注目するのではなく、生徒が用いるメタ認知的戦略を評価する

アイビックによる評価の問題

→課題そのものの中で、生徒が独立した能動的な学習者であることを示す機会を提供しなければならない

結論

・生徒の学習の評価は、生徒自身が作り上げるモデルや深く理解したことに焦点をあてるべき

・「問題解決活動」「支援の活用」「知識の転移や応用」について評価をする

= 「生徒が何をしているのか、どのような学習の戦略を用いているのか、自分の学習について意識しコントロールする能力をもっているか」を評価する

・「何ができつつあるのか」も評価する